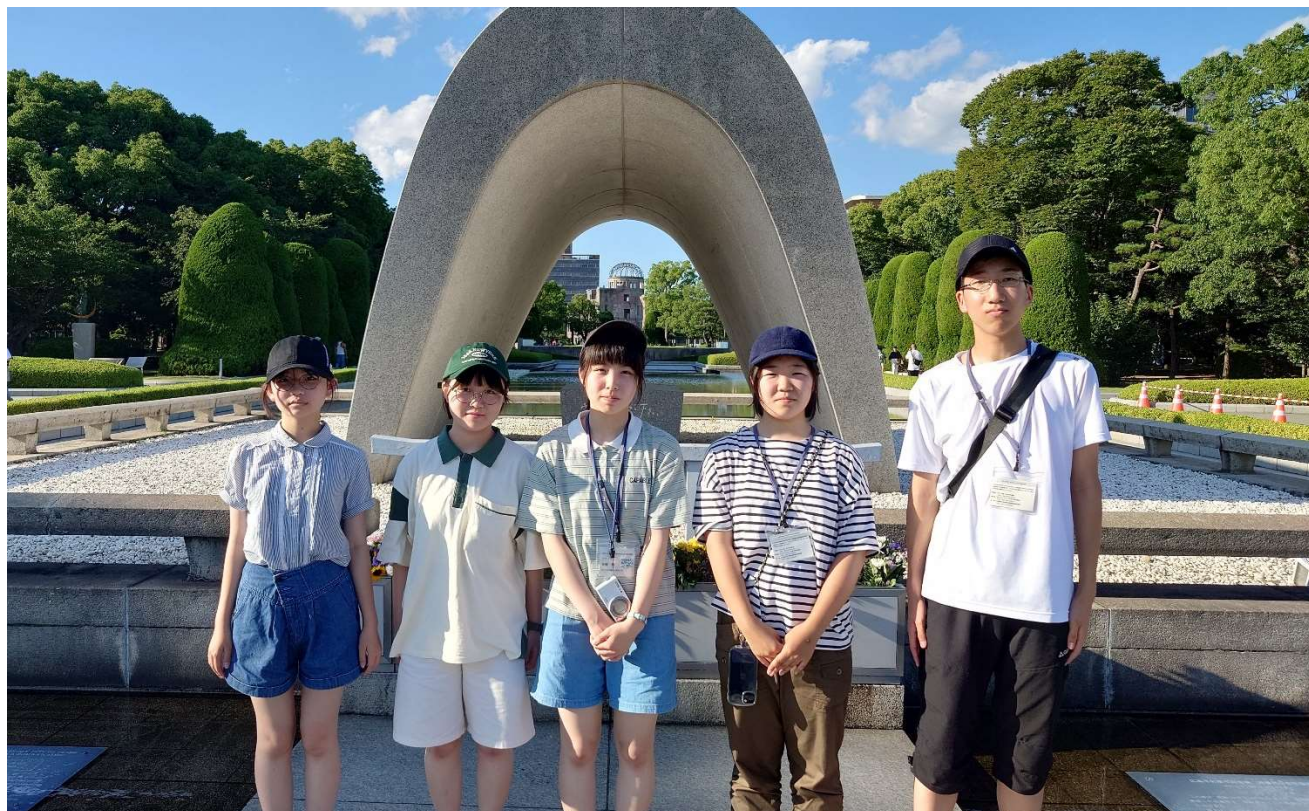




令和6年度 苫小牧市中学生広島派遣事業

体験感想文集

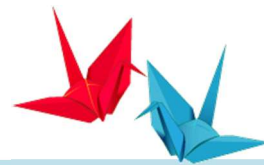
平和の翼

苫小牧市総合政策部政策推進課

目 次

◆	中学生広島派遣事業を終えて 政策推進課 三木 悠史 ➤	1
◆	苫小牧東中学校 3年 飛岡 さくら ➤	2
◆	開成中学校 2年 笹嶋 碧 ➤	4
◆	ウトナイ中学校 3年 林 蘭々 ➤	6
◆	明野中学校 2年 栗本 陽香 ➤	8
◆	青翔中学校 3年 川合 恒輝 ➤	10
◆	事業の様子 ➤	12
◆	苫小牧市非核平和都市条例条文 ➤	18

令和6年度 中学生広島派遣事業を終えて



苫小牧市総合政策部政策推進課
主事 三木 悠史

本事業は、次代を担う子どもたちが被爆地である広島を訪問し、戦争と平和に対する意識を高め、その経験等をもとに市民に平和の尊さを考える機会を設けてもらうことを目的に実施しています。本研修は平成7年から行われており、実施回数は28回目を迎え、派遣された人数は今回の派遣者を加え145名となりました。

今年度は、7月19日に事前学習、7月26日に市長表敬を終えて、7月29日から31日までの3日間で派遣研修を行いました。

派遣者はこの3日間で、被爆者である豊永恵三郎さんから直接お話を伺ったほか、平和記念資料館の見学、平和の子の像への千羽鶴奉納、本川小学校平和資料館の慰霊碑への献花及び施設見学などを行いました。

また、8月15日の平和記念式典では派遣者一同による「平和の誓い」を発表し、各学校の2学期始業式などでは、他の生徒たちへ今回の学びを伝えてもらいました。

本事業を通して、派遣された5名の中学生には戦争の悲惨さや原爆の実相、平和の尊さについて、深く学んでもらえたと思います。これからも、広島で受け取った平和への想いを周囲へ語り継ぎ、核兵器のない恒久平和の実現に貢献してくれることを期待しています。



最後に、今回の広島派遣事業を実施するに当たり、御理解と御協力をいただいた皆さまにこの場をお借りして感謝申し上げます。



私の訪問した広島は、青い空でおおわれ、高いビルが立ち並び、道路には路面列車が走っていた。スーツを着て汗を流しながら通勤する人、平和記念公園を散歩する幼稚園児の姿も見られた。広島は活気にあふれていた。まるで79年前の出来事が無かったかのよう。

1945年8月6日8時15分「ピカッ」「ドーン」広島に原子爆弾が落とされた。辺りは一瞬にして灰色の焼け野原となり、あちらこちらで発生した火災は広島を覆い、灰色の煙で包まれた。生き残った人々は「苦しいよ」「死にたくない…」と精一杯叫ぶ。火の中を必死の思いで逃げ回る。家族も友人もみんな死んでしまったから、ひとりで。そして空からは放射能を帯びていた黒く、粘り気のある雨が降ってきた。乾いた喉を潤すために雨粒を呑み込んだ。火災は一日中続いた。翌日、家族を探しに広島へ向かっても家族の姿はなかった。あったのは、やけどで顔が真っ黒になった死体だけ。そして数日たっても広島に残る、残留放射線によってまた尊い命が奪われた。生き残った人々の顔は火傷で腫れあがり、皮膚はだらりと垂れ下がる、体は血みどろ。まるで幽霊を見ているようだったそう。戦時中で物資がないため治療もしっかり受けられず1日、2日、3日と時間が経っても原子爆弾による死者は増え続けていった。

この一発の原子爆弾でたくさんの尊い命や広島町の町が奪われていった。私は広島での研修を通して、このような原子爆弾、そして戦争の恐ろしさを改めて痛感した。そして今ある平和でありふれた日常がどれだけ幸せなのか考えさせられたとともに、なんだか申し訳なくなってきた。

戦争が終わっても、80年経った今でも、あの戦争によって、一発の原子爆弾によって苦しみを続けている人はたくさんいる。そして世界を見回すと戦争を行っている国もあるし、核兵器の開発をしている国だって増え続けている。

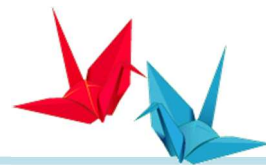


そんな中、中学生の私たちには何ができるのだろうか。私は写真で見た朱色がかった空と、研修中に見た青い空が頭に浮かんだ。私がこの青い空を見られることはどれだけ幸せなのだろう。この青い空は平和の象徴のように思えた。それと同時にどれだけ多くの人が「平和」に向けて努力したのだろう、どれだけの人が今の活気ある広島を作ったのだろう、そう考えるようにもなった。

私たちは、この空をずっと守り続けていかなければならないと思った。

被爆した方々のためだけではない。戦争によって苦しみ、悲しんだすべての人のために。そして、戦後から今まで平和を守り続けてきた人々のために。私たちには、平和を守っていく責任がある。私は、広島で被爆された方から「平和のバトン」を受け継いだ。その「平和のバトン」が途切れることなく、そして日本だけにとどまらず、世界まで「平和のバトン」を繋げることができたなら…。どれだけ多くの人に「平和のバトン」を繋げば世界が平和になるのかなんて到底分からないけれど、私たちはあの悲劇をずっと忘れず、「平和」を願うこと、「平和」を守り続ける努力をすることが大切なのだと思う。





私たちは、7月29日から31日の3日間、苫小牧市中学生広島派遣事業の派遣者として、広島を訪問しました。広島は北海道とは違い、蝉の音が響く暑さの中、きれいな青空が広がっていました。昔この場所で、あの悲惨な出来事が起こったなんて、想像もできませんでした。

1945年8月6日午前8時15分、広島に原子爆弾が投下され、一瞬にして多くの人々の命が奪われました。その人数は、約14万人にも及びます。今でも被爆で苦しむ人々や、原爆症によって苦しむ人々がたくさんいます。

今回の研修では、最初に豊永恵三郎さんの被爆体験のお話を聞きました。このお話が一番印象に残りました。豊永



さんの当時の家は爆心地から約2.5kmほど離れていたそうです。8月6日の朝、豊永さんは中耳炎のため学校を休み、市外の病院に行っていました。家から約10kmほど離れたところを歩いている時、後ろからものすごく大きな音がしました。原子爆弾です。空には、勢いよくキノコ雲が上がっていました。豊永さんは、一番に家族のことが心配になり、急いで列車に乗って広島駅に向かおうと思いましたが、駅が焼けて戻れなかったそうです。そのため、祖父母の家に行き、一緒に家族を探しに行きました。そして3日後の8月9日、家族との再会を果たすことができました。「私たちは運がよかった。幸せな方だ。」と、豊永さんはお話しされていました。

豊永さんはお話の最後に、私たちに向けてある「お願い」を伝えてくださいました。それは「あなたたちは、平和を守っていく責任があるのではないか。」ということ。いま日本は戦争をしていませんが、昔起きた出来事は決して忘れてはいけません。いまを生きている私たち、そしてこれから生きていく人たちは、「平和のバトン」を繋いでいく責任があるのです。そのためには、努力が必要だと私は思いま

す。豊永さんのお話は、原爆がどれほど恐ろしいものか想像でき、話の中に引き込まれてしまいました。

その後は平和記念資料館を見学しました。資料館には、やけどを負ってしまった人の写真や、ボロボロになってしまった服など、いろいろなものが展示されており、とても心が痛みました。中には、涙を流している外国人の観光客の方もいました。

2日目は、「原爆の子の像」に千羽鶴を奉納しました。たくさんの色とりどりの折り鶴が奉納されていました。その後は本川小学校に行き、岩田さんのお話を聞きました。戦争の恐ろしさを肌で感じることができました。

過去の出来事は変えることができませんが、これからの未来はまだまだ変えることができると思います。「平和のバトン」を多くの人に繋ぎ、日本だけでなく、これから先もずっと、世界の人々が当たり前な毎日を送れることを願っています。





私たちはこの夏、広島派遣事業に参加し原爆の恐ろしさや、今ある平和がどれだけ尊いものなのかを学んできました。

今から 79 年前、1945 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分、広島に突如原子爆弾が投下されました。原爆の威力はとても恐ろしく、爆発点は数十万気圧という超高圧となり、それによる爆風で多くの尊い命が奪われたほか、木造家屋は倒壊し、鉄筋コンクリート造の建物も窓は全て吹き飛ばされ、大きな被害が生じました。また原爆から生き残った人々は被爆後、長期にわたり放射線による被害に苦しめられました。このことを知った私は戦争の怖さを知ったと同時に、戦争という非常に無慈悲な出来事にとってもショックを受けました。



実際に広島を訪れ、三日間研修を行った中でいちばん心に残ったことは平和記念資料館での出来事です。入館し本館へ向かうとまず目に飛び込んできたものは被爆者の写真や遺品でした。これらは私たちに被爆の実態を伝えると同時にその恐ろしさと悲惨さを痛感させるものでした。さらに進んでいくと、幼くして亡くなってしまった小中学生の写真や遺品、そして放射線による被害や家族・友人を失った悲しみに耐え、前に進んでいく方々の写真などが見られ、私は只々、胸が締め付けられる思いでいっぱいになりました。そして資料館からでた私はすこし放心状態のまま、とぼとぼと長い廊下を歩いていました。するとベンチに、自分と同じく資料館を見終わった二人の外国人の方がいました。ふとその二人を見てみると二人とも涙を流していました。その姿を見て私は、たとえ文化や言語が違ってても、戦争はもう二度と犯してはいけないという思いは同じなんだなと思いました。

平和記念資料館の見学を通して、私は戦争や核兵器の恐ろしさを改めて感じ、被爆者の方々がどれほどの苦しみを経験してきたのか、そしてそれを乗り越えるため

にどれほどの勇気をもって立ち上がったのかを知ることができました。私たちは彼らの苦しみと勇気を忘れてはいけないし、同じ過ちを繰り返してはいけないのです。

現在、日本は戦争を行ってはいませんが、ウクライナやアフガニスタンなど、世界では今でも争いが続いています。そこでは誰もが関係なく銃やミサイルなどで殺されています。そんな現実がある中、生きている私たちはこの事実を目を背けるのではなく、一人一人が平和への願いを持ちそれを行動に移す力が必要だと私は思いました。

最後になりますが、私はこの広島派遣事業の三日間の研修で、たくさんの経験をさせていただき、今ある平和を未来につなげていく重要性を学びました。

私はこの幸せを守るために、広島で受け取った平和のバトンを、未来へつないでいこうと思います。





私たちは、広島へと派遣されました。広島は長崎と同じように、原子爆弾が投下された場所です。この地で「平和の尊さ」というものをたくさんの体験から学んできました。

広島へ降り立ってからまず初めに、語り部の豊永さんのお話を聞きました。だんだんと語り部は少なくなっているのが当時のお話は、とても貴重なものだと感じました。同時に息が詰まるようでした。豊永さんは被爆地から離れていましたが、後ろで大きなきのご雲が上がりました。きっとその中には自分の家族、友達がいるのだと思うと怒りを覚えたそうです。豊永



さんの家族は無事だったようですが、全身のやけどで区別がつかないくらいだったそうです。お話を聞いた後は、平和記念資料館に行きました。目を向けられないほどの現実、涙を流す人々もいました。一瞬の出来事が、どれほどの命を奪ったことでしょう。原爆の被害で血を流す人、たくさんの頭蓋骨といった写真。衣服が破け全身が真っ黒の状態に逃げた人々の絵。たくさんの展示品を見ました。残っている現物も見ましたが、ひどい状態でした。

二日目には本川小学校へ訪れました。本川小学校というのは、被爆時、学校の中で一番近かった小学校だそうです。そして被爆しても壊れることなく生き残っていた建物です。今では、新築して学校として使っているそうですが、当時のことを伝えるために一部だけ残したといいます。その中にいた生徒や先生はほぼ全滅という状態だったとガイドさんに教えてもらいました。その話の中で、心に残ったことが二つありました。一つは当時の本川小学校の話でした。被爆後けが人が本川小学校には運ばれてきていました。すでに亡くなっている人もいたそうです。その亡くなった人たちは埋めることしかできませんでした。グラウンドに穴を掘り、人を入れ

土をかぶせます。それを何回も繰り返し、何千人という人々がそこに埋葬されました。ですが火葬はしていません。つまり今でもグラウンドを掘れば、見つかるかもしれない状態だそうです。そう考えると、自分が今まで歩いてきた道の地下には、と考えてしまいました。もしかしたらの話でも、恐ろしかったです。もう一つはガイドさんの母は家族写真を最後に撮ったという話を聞きました。ですが、その写真を見ることができたのはガイドさんの母一人だったそうです。それ以来写真はトラウマになったと教えてくれました。被爆者の中には、体に傷が残る人だけではありません。今でも心に傷を持っている人がたくさんいます。

「今まで話してきたことは、昔のことだと考えてはいけません。戦争が終わり時間がたったから平和になったわけではありません。平和な世の中を作るためには努力が欠かせません。平和を維持するためには、昔のことだと思わず、受け止めていくことがとても大切です。次は私たちが平和を守っていかなくてはならない。」この言葉を忘れることなく生きていきたいです。





「あなたは原子爆弾がどのような兵器か知っていますか」

こう僕が質問した時、ほとんどの人が「はい」と答えるでしょう。こんな質問答えられて当然だ、などと思うかもしれませんが、この原子爆弾という恐ろしい兵器を永遠に忘れないことが、この日本の平和を保っていく上で大事なことだと僕は思うのです。

今から 79 年前、1945 年の 8 月 6 日、広島に原子爆弾が投下されました。亡くなった方は今わかっている時点でも約 14 万人にも達し、栄えていた街が一瞬にして、焼け野原と化しました。

そんなことが起こった広島で僕たち 5 人は 7 月 29 日から 7 月 31 日までの三日間様々なことを学んできました。その中でも一番印象に残っているのは原爆平和記念資料館です。そこには、多くの原爆に関する絵、写真、資料などがあったのですが、全身やけどして、真っ黒こげになった人の写真や水へ飛び込んでいく人々の絵など正直どれも吐き気を催すような残酷なものばかりでした。その分、学べることも多く、原爆の脅威やその被害の深刻さがよく実感できました。

次に印象に残っているのは、本川小学校平和資料館です。ここは、被爆した小学校の一部が資料館として今でも残っている場所であり、熱風が通って、焦げた建物の一部や原爆が落とされ、破壊された建物などのがれきの山の写真など、そこもまた被害の深刻さを実感できる資料がたくさんありました。他にも原子爆弾をもう落としてはいけないと実感できるような体験をたくさんすることができました。

このような体験から僕は平和は時間が経つと勝手になっていくものではなく、たくさんの人が努力してなっていくものだということがわかりました。原爆が落とされてから 79 年、その間には、復興活動を行った人たち、元々敵だった外国との仲を



取り戻した人たち、原子爆弾の脅威を後世につないでいこうとする人たちがたくさん
の人の努力の末、今の平和な日本となるのです。

しかし、原子爆弾という恐ろしい兵器を実際に体験した人たちは年々減り続けて
おり、いなくなってしまうのも時間の問題です。そうなった時は、僕たちがこの平
和を守っていく番です。何をしたらいいのかと疑問に思うかもしれませんが、僕た
ちがやるべきことは大きく分けて2つです。

最初に聞きました、「あなたは原子爆弾はど
のような兵器か知っていますか」と1つ目
は、この質問の答え、つまり、原子爆弾の恐
ろしさをずっと覚えておくことです。2つ目
は、原子爆弾の恐ろしさを次の世代に語るな
どして、永遠に忘れさせないことです。

これは、前の世代から受け継がれているいわ
ば「平和のバトン」です。

このバトンが永遠に途切れず、今の日本の
ような平和が世界へ広がっていくことを願っ
ています。



事業の様子

令和6年7月19日（金） オリエンテーション・事前学習

研修当日の役割分担やスケジュール、注意事項を確認し本番への準備を行いました。その後、原子爆弾投下後の広島ビデオを鑑賞し、研修本番に向けた事前学習を行いました。



令和6年7月26日（金） 市長表敬

オリエンテーション・事前学習を終え、広島派遣者による市長表敬を行いました。

それぞれ自己紹介を行い、研修に対する意気込みや研修に参加した動機を語り、山本副市長から激励の言葉をいただきました。

6月3日～28日まで市役所、のぞみ・沼ノ端コミセンに設置していた折り鶴コーナーにより、市民の皆さまからたくさんの折り鶴をいただきました。御協力ありがとうございました。



《1日目》7月29日（月）

- *語り部・豊永恵三郎さんによる被爆体験講話を受講
- *広島平和記念資料館見学

《2日目》7月30日（火）

- *広島平和記念公園内「原爆の子の像」へ千羽鶴を奉納
- *本川小学校平和資料館慰霊碑へ献花
ガイドの岩田美穂さんによる解説と見学
- *世界遺産「厳島神社」見学

《3日目》7月31日（水）

- *帰苦



豊永恵三郎さんによる被爆体験講話、広島平和記念資料館見学

1945年（昭和20年）8月6日午前8時15分。広島に世界で初めて原子爆弾が投下され、その年の12月末までに約14万人の人々が亡くなりました。

残留放射線によって被爆した語り部の豊永恵三郎さんから、被爆体験についてお話をしていただきました。当時を経験された豊永さんの講話は大変貴重な経験となりました。



▲被爆体験講話の様子

その後、平和記念資料館へ向かい、当時の情景を物語る様々な展示物を見学しました。黒こげになった弁当箱、当時の光景を描いた絵、高熱で溶けたガラス瓶など、被爆した方の遺品の数々と共にその遺品等に対するメッセージが展示されていました。

平和記念公園、本川小学校平和資料館

【平和記念公園】

派遣者の在籍する各中学校の生徒が作成した千羽鶴と、苫小牧市民の皆さまから寄せられた折り鶴で作成した千羽鶴を「原爆の子の像」へ捧げました。

【本川小学校】

本川小学校は爆心地から350m離れたところにあり、原爆により約400人の児童と校長先生のほか10人の教師が一瞬にして命をうばわれました。

この平和資料館は、昭和3年に広島で初めて建てられた鉄筋3階建ての校舎の一部で、被害を受けた状態をそのまま残し、被爆の「証」として保存されています。展示されている写真や遺物には、多くの人々の悲しみや願いが込められています。

ガイドの岩田美穂さんから、岩田さんの母親が体験したお話や当時から現在までの小学校の様子をお話いただきました。



▲奉納した千羽鶴



▲本川小学校資料館



▲資料館前の慰霊碑



▲岩田さんの説明を聞く様子

令和6年8月15日（火） 苫小牧市平和祈念式典

終戦の日に行われた平和祈念式典では、林さんが派遣者を代表して広島派遣の体験感想文を発表し、派遣者全員で平和の誓いを朗読しました。

▼平和記念式典に出席する派遣者



▼体験感想文を読む林さん



『平和の誓い』

「安らかに眠ってください 過ちは繰返させぬから」
広島慰霊碑にはこの言葉が刻まれていました。

今から七十九年前の一九四五年八月六日、広島に原子爆弾が投下され、八時十五分で止まった時計は二度と動くことはありませんでした。

多くの尊い命や当たり前で過ごしてきた日常が、一瞬にして奪われました。原爆による悲しみや苦しみは、私たちが想像できないほどの辛さだったと思います。

そして、今も世界では戦争による被害は絶えません。友達と笑い合えることや家族と美味しいご飯を食べられることは、当たり前ではありません。

私たちの幸せな日常があるのは、戦争から時間が経ったからではなく、多くの人々が平和に向けて努力した結果です。

戦争による被害に遭った人々や、今まで平和を守り続けてきた人々を想い、戦争という過ちをこれ以上繰り返さないため、私たちは平和のバトンを繋いでいく責任があります。

日本だけでなく、世界中の人々が戦争による支配を受けず、大切な人たちと笑顔で暮らしていけるように、私たちに何ができるのかを考え、行動に移していくことを誓います。

事後研修～各中学校での体験発表～

▼苫小牧東中学校 飛岡 さくら さん



▼開成中学校 笹嶋 碧 さん



▼ウトナイ中学校 林 蘭々 さん



▼明野中学校 栗本 陽香 さん



▼青翔中学校 川合 恒輝 さん



広島派遣事業の事後研修として各中学校で派遣者による体験発表を行いました。
実際に被爆地に行き、感じたことや見たものを他の生徒達にも伝え、平和について考えてもらう時間を設けました。それを聞いた皆様にも、さらに家族や友人に伝えていただき、一人でも多くの市民の方々に平和の思いが広がることを願っています。

協力していただいた各中学校の皆さまありがとうございました。

その他 本研修の様子



▲戦没者慰霊碑

平和記念公園にある戦没者慰霊日からは、原爆ドームを臨むことができます。公園内では平和記念式典の準備をしていました。



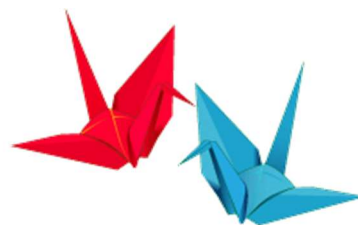
▲原爆の子の像

2歳の時に被爆した佐々木禎子さんが、10年後に白血病で亡くなったことをきっかけに、同級生たちが慰霊碑をつくろうと呼びかけ、昭和33年に完成しました。



▲平和の鐘

原爆被災者広島悲願結晶の会が昭和39年9月20日に建立しました。鐘は重要無形文化財保持者（人間国宝）、香取正彦さんの作品です。鐘の表面には「世界は一つ」を象徴する、国境のない世界地図が浮き彫りにされています。撞座は、原水爆禁止の思いをこめて原子力マークにし、その反対側には、撞く人の己の心を写しだす鏡が入れられています。（引用：広島平和記念資料館 HP）



▲平和の鐘の説明

苫小牧市非核平和都市条例

わたしたち苫小牧市民は、安全で健やかに心ゆたかに生きられるように、平和を愛するすべての国の人々と共に、日本国憲法の基本理念である恒久平和の実現に努めるとともに、国是である非核三原則の趣旨を踏まえ核兵器のない平和の実現に努力していくことを決意し、この条例を制定する。

(目 的)

第1条 この条例は、本市の平和行政に関する基本的事項を定め、市民が安全で健やかに心ゆたかに生活できる環境を確保し、もって市民生活の向上に資することを目的とする。

(恒久平和の意義等の普及)

第2条 市は、日本国憲法に規定する恒久平和の意義及び国是である非核三原則の趣旨について、広く市民に普及するように努めるものとする。

(平和に関する交流の推進)

第3条 市は、他の都市との平和に関する交流を推進するように努めるものとする。

(その他平和に関する事業の推進)

第4条 市は、前2条に定めるもののほか、平和の推進に資すると認める事業を行うように努めるものとする。

(平和の維持に係る協議等)

第5条 市長は、本市において、国是である非核三原則の趣旨が損なわれるおそれがあると認める事由が生じた場合は、関係機関に対し協議を求めるとともに、必要と認めるときは、適切な措置を講じるよう要請するものとする。

(核兵器の実験等に対する反対の表明)

第6条 市長は、核兵器の実験等が行われた場合は、関係機関に対し、当該実験等に対する反対の旨の意見を表明するものとする。

(委 任)

第7条 この条例の施行に関し必要な事項は、市長が定める。

附 則

この条例は、公布の日から施行する。

(平成14年4月1日公布)



【 発 行 】

苫小牧市総合政策部政策推進課

所在地：〒053-8722 苫小牧市旭町4丁目5番6号

電 話：0144-32-6039 FAX：0144-34-7110

E-mail：seisaku@city.tomakomai.hokkaido.jp

(令和6年12月2日)